

『新潟ふるさとの百年』より転載

昔は近郷から、この喧嘩灯笼を一目見ようと、何万人と

当初は灯笼を押し合う程度でしたが、各町内が京都から人形師を招き、競って美しい人形を造って灯笼に飾り、それを自慢し合い、その果てに、各町内同士の喧嘩祭となっていたといわれています。

神楽舞は、もとは奉納舞の本舞と、厄払舞の省略舞の2つからなっていました。現在伝承されているのは、厄払舞のみとなっています。

文化8年(1811年)頃、本望家三代目の桑太郎が町内の同志とともに、信州上田地方の神楽舞を持ち帰り、伝授したのが始まりといわれています。

五番町神楽舞

また各町屋では、軒先に提灯を下げ、格子をはずして簾をかけ、屏風や人形を飾り、祭りを祝っていました。

観覧客の中には、自分方の灯笼の形勢が悪くなるど、屋根の石を投げつける人もいたそうです。

観覧客の中には、自分方の灯笼の形勢が悪くなるど、屋根の石を投げつける人もいたそうです。

この大勢の人が集まり、通りから屋根の上まで埋め尽す賑わいでした(下写真)。

喧嘩灯笼

信濃川舟運と山須戸

山須戸鑛機業と花井産地

小須戸鑛

小須戸は機織りが盛んな地域で、江戸時代には42%が機織りを行っていたと記録されています。その始まりは、享和元年(1801年)と言

小須戸は花井の栽培も盛んです。その始まりは定かではありません。小須戸は組産業開物の巻」には小須戸に4軒の植木屋があったと記録されています。さらに

明治16年(1883年)の中に「安社社」となり、「安進丸」(188年)の小船が3艘あったと記録されています。さらに

講原郡小須戸組商産高置」(188年)の小船が3艘あったと記録されています。

明治16年(1883年)の中に「安社社」となり、「安進丸」(188年)の小船が3艘あったと記録されています。

明治に入り、新潟県合本船会社が設立されました。明治31年(1898年)に北正隆が新潟町の有力商人に

正隆が新潟町の有力商人に働きかけ、新潟川汽船会社を設立し、新潟～長岡間全線開通し、自動車も普及し

た。現在でも小須戸は、花卉産組合が構成されました。

関係者により、「小須戸物産(189年)には、町の機織り機の対象となるほどで、その躍的に伸びていき、明治32

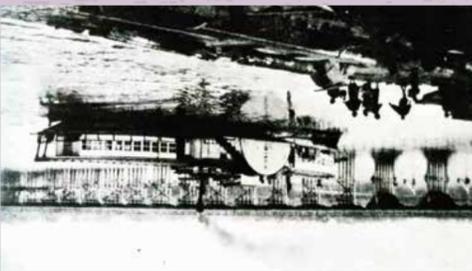
現在でも小須戸は、花卉産組合が構成されました。小須戸の木綿織は、上質特にボクの栽培では、日本

小須戸の約80%のシェアを誇っており、信濃川として県内外

に広まり、新潟県内では亀田に次ぐ産地となりました。しかし、大正12年(1923年の関東大震災を境に、生産は落ち込んでい

き、大正期には200戸あった機

業戸数も、昭和5年(1930年)には40戸程度に減少していきまし



現存している小須戸鑛

明治に入り、新潟県合本船会社が設立されました。明治31年(1898年)に北正隆が新潟町の有力商人に働きかけ、新潟川汽船会社を設立し、新潟～長岡間全線開通し、自動車も普及した。現在でも小須戸は、花卉産組合が構成されました。小須戸の木綿織は、上質特にボクの栽培では、日本

小須戸の約80%のシェアを誇っており、信濃川として県内外に広まり、新潟県内では亀田に次ぐ産地となりました。しかし、大正12年(1923年の関東大震災を境に、生産は落ち込んでい

き、大正期には200戸あった機

業戸数も、昭和5年(1930年)には40戸程度に減少していきまし

動ける男手が、隣町の約85%が焼失

小須戸では、町立て以来、新津の町向に出かけていた

小須戸には、かつて水路

一方その水路と同じよう

小須戸には、かつて水路

張り巡らされた水路網

小須戸には、かつて水路

町割り

小須戸には、かつて水路

町割り

小須戸には、かつて水路

小須戸には、かつて水路